

ノンフィクション作家の最相葉月氏が『日本のキリスト者 証し』を上梓している。最相氏はキリスト教主義学校で学び、キリスト教については親しんでいたが、キリスト者ではない。北海道から沖縄まで、カトリック教会、正教会、プロテスタントの諸教会、無教会、更に、在日の諸教会も訪ね、数千人のキリスト者と出会っている。その中から135人の信徒、教職者たちの証言を集め、現代日本におけるキリスト者の証しの姿と言葉を報告している。膨大なエネルギーを費やし、単行本で千頁を越す大部の本にまとめている。

冒頭、「『証し』とは、キリスト者が神からいただいた恵みを言葉や行動を通して人に伝えること、証、証言ともいう」と書いている。その「証し」は差別、戦争、病、死、そして罪の贖いと赦しなど、多様な領域に渡り、述べられている。人はなぜ、神を信じるようになるのかについて、心の動きを伝えていて、興味深い。そして、キリスト教会は、現在は減少傾向にあるようだが、全国津々浦々で、キリスト者たちは果敢な証しの生活をしていることを聞かされ、勇気づけられることは確かである。

135人の内、親しい人の証しが掲載されていたので、その人のことと私との関りについて書きたい。大分県杵築教会の「堀澄子さん」は「ある日、牧師先生に『きみはいい子だね』って声をかけられたんです」というタイトルで紹介されている。杵築教会は私が洗礼を受けた母教会である。杵築教会には、米国のメソジスト教会から派遣されたタウソンという女性宣教師がおられた。外国人の少ない町なので、彼女は目立つ存在で、私も彼女を見知ってはいたが、話をしたことはない。

タウソン師が帰国した後、若い吉新治夫牧師が赴任され、その頃、私は教会に行き始めた。私が高校生の時である。牧師は熱心に聖書を教えてくださり、私は生きる希望を持ち、また、読書指導を通してキリスト教世界の深さと広さに魅せられ、洗礼を受け、牧師になる決心をした。吉新牧師は、私を生きることへと導いてくれた大恩師である。結婚せず、家庭を持たず、生涯の全てを杵築教会のために献げた。

澄子さんは、その吉新牧師から「きみはいい子だね」って声をかけられ、その一言が彼女を立ち上がらせた。家も貧しく、成績もよくなく、学校の先生からは無視され、嫌というほどのいじめにも遭ってきたそうである。その中で、牧師の言葉は心の支えになったと言う。私より5歳くらい年上で、三代目のクリスチャンで、子どもの頃から教会学校に通っていた。彼女は聖和女子短期大学に行き、杵築教会の「白百合幼稚園」の教諭として、働いていた。彼女は、吉新牧師を献身的に支え、幼稚園教諭として働き、結婚せず、全てを杵築教会のために献げてこられた。私の求道中、本当に親切に色々教えてくださった。現在は、私のことを「秋吉先生」などと呼んでくれているが、おそらく「弟」のように思っているのではないかと。年に数回、カボスやミカン、杵築市の特産品などを贈ってくれる。

吉新牧師は人口3万人くらいの仏教の強い杵築市に留まり続け、驚くほど立派な教会を献堂した。パイプオルガン、ステンドグラス、鐘もある。会堂と園舎が繋がりに、道路から見ると、スペイン風の見事な建物である。私は、杵築教会の半分は澄子さんのお陰であると思っている。教会は、このような無私の信徒の働きによって、立っているのである。

杵築教会は現在、牧師がいなく、近隣教会の牧師により礼拝を守っている。会員は20名くらいで、礼拝出席者は十数名である。澄子さんに先日電話したところ、入院中とのこと、話も何だか通じなかった。「いい子だね」と言われた澄子さんの回復を祈っている。